

平成 27 年度

第 60 回 長野県中学校連合教科研究会

# 英 語 科

I	研究テーマ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
II	趣 旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
III	参加校テーマ一覧と参加者氏名・指導者氏名・・・・・・・・	1～2
IV	研究問題と協議内容・・・・・・・・・・・・・・・・	4～10
V	本年度研究会の反省と来年度の方向・・・・・・・・	10～12
VI	あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・	12

## I 研究テーマ

「コミュニケーションの基礎を養うための授業の構想化と評価のあり方」

## II 趣旨

- ・ 「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を総合的に育成するための場面設定や評価方法について具体的に学ぶことができるようにしていく。
- ・ 指導要領の改訂(年間の指導計画の検討)、小中の連携についても考えていけるようにしていく。

## III 参加校テーマ一覧と参加者氏名・指導者氏名

### 【第1分科会】

指導者	北信教育事務所指導主事	伊藤 尊夫 先生
司会者	千曲市立戸倉上山田中学校	櫻田 智也 先生
記録者	長野市立広徳中学校	楯岩 雄治 先生
世話係	信州大学教育学部附属長野中学校	棟田 晃 先生
中学校名	研究の趣旨	発表者
浅科中	クラス全員が認め合い、自信をもって英語を読み、話せるようになる英語教室の創造 ～英語の基礎力をつけ、表現へと高める指導～	中村亜佳里
第二中	既習表現を活用し、友とかかわりながら自分の思いや考えを表現しようとする生徒を育てるための、ペア活動のあり方	鈴木 真也
諏訪南中	既習表現を使い、目的を持って自己表現し、友と学び合うことができる学習はどうあるべきか ～スピーキング活動に焦点を当てて～	伊藤 雄希
箕輪中	英語教育における ICT 機器の活用	片桐 梨奈
飯島中	Can-Do List を使った授業とその評価	竹内 大輔
山之内中	英語を好きにさせ、英語力を自らつけようとする生徒の育成	小林 千隼
東北中	「読む」から「話す」へ 英語をツールとして使いこなすために	丸山 優子
附属長野中	英語で書かれた内容を批判的にとらえる力を高める指導の在り方	棟田 晃

### 【第2分科会】

指導者	東信教育事務所主任指導主事	川口 伸哉 先生
司会者	信濃教育会教育研究所研修員	西村 晃洋 先生
記録者	佐久市立野沢中学校	上野 大 先生
世話係	信州大学教育学部附属長野中学校	矢野 司 先生
中学校名	研究の趣旨	発表者
伊那中	既習表現を用いて、自分の考えや気持ち、事実など、伝えたいことを相手にわかりやすく伝えるための指導はどうあったらよいか	城取 恭子
豊科北中	友だちと関わり合いながら表現する力を付けるための指導はどうあったらよいか	永嶺 茜
開田中	高度化を念頭に、小学校との接続を意識し、4技能の活用を通して、知識、技能の習得を一層確かなものにしていく英語学習のあり方	桐井 誠

鉢盛中	外国語活動と中学校英語の連携を考える	平野 朝将
箕輪中	英語教育におけるICT機器の活用	野澤 昌史
大町第一中	思考力・判断力・表現力を高める英語授業のあり方	米山 聡
附属長野中	英語で書かれた内容を批判的にとらえる力を高める指導のあり方	矢野 司
附属松本中	読み手（聞き手）の思いを受け止めながら、伝えたい内容を表現する授業のあり方	三澤 勇介

### 【第3分科会】

指導者	中信教育事務所指導主事	三井 康幸 先生
司会者	長野市立東北中学校	勝山 厚志 先生
記録者	上田市立第二中学校	佐藤 大樹 先生
世話係	信州大学教育学部附属長野中学校	橋爪 祐一 先生
中学校名	研究の趣旨	発表者
丘中	「分かった」、「できた」が実感できる授業の創造	桑原 摩帆
筑北中	読んだり、聞いたりしたことをもとに、英語で話す力を高める指導のあり方	宮坂 晃
坂城中	話し手の意思を理解するための「聞く活動」の指導のあり方	立沢 志帆
戸上中	会話を継続し、発展させていく力を高めるための指導のあり方	秋山 千晶
東中	苦手意識を持っている生徒たちが前向きに取り組める教材、活動のあり方	横山 裕季
附属長野中	英語で書かれた内容を批判的にとらえる力を高める指導のあり方	橋爪 祐一

### 【第4分科会】

指導者	南信教育事務所指導主事	宮下佐知子 先生
司会者	長野市立三陽中学校	飯島 廣樹 先生
記録者	小諸市立小諸東中学校	小栗 千佳 先生
世話係	信州大学教育学部附属松本中学校	矢島 裕文 先生
中学校名	研究の趣旨	発表者
若穂中	生徒自らが積極的に音読活動に取り組めるための指導はどうあったらよいか	野澤 瞳
附属長野中	英語で書かれた内容を批判的にとらえる力を高める指導のあり方	梨本絵理香
諏訪西中	正しい語順で英作文を書く指導のあり方	宮寄 成美
旭ヶ丘中	生徒にまとまりのある英文を書かせるための場面設定とペア活動のあり方	宮坂 浩司
附属松本中	賛成や反対について自分の考えを持ち英文を書く指導のあり方	矢島 裕文
岡谷東部中	意欲的に英語で表現し、伝える喜びを味わえる生徒の育成	清水 士
菅平中	より積極的にコミュニケーションするための指導のあり方	小柳 昭喜
埴生中	自分の考えを発信できる授業の創造 スキット、スピーチの活動を通して	高見澤益子

## IV 研究問題と協議内容

### 【第1分科会】

#### 討議題1 Speakingに関する指導の在り方(1)

(1) 自分の思いや考えを表現しようとするためのペア活動の在り方について

既習表現を活かし、友と関わり合う活動を通して、英語表現につながるように指導した。具体的には三人称単数現在形の導入の場面で、ALTとJTEのやりとりから、既習表現を活かした活動を口頭で行い、個人にノートに書かせ、ミステイクを修正しながら、確認した。(第二中)

(2) 「読む」から「話す」へつながるペア活動

“May I~?”の単位では、オリジナルのスキットを作り、ペアやグループで相互評価を行った。友達と気持ちを込めて対話するために、ジェスチャーやアイコンタクトを意識させた。

低位生もジェスチャーを駆使しながらなんとか英語で伝えようとする姿が見られた。(東北中)

#### <指導者の先生の指導>

(1) 三人称単数現在形について学習する単位だが、言語材料の定着を図るのであれば正確さを評価するし、対話活動がメインの活動ならば「話す力」に焦点を当てるようにしたい。

(2) 言語材料を理解して練習する場面なのか、または会話の中で活用する場面なのかをはっきりさせて授業を組み立てるとよい。たとえば、指導要領の「話すこと」の(ウ)の指導事項を何学年のどの単元で目標として設定することが適切か考えて決めていきたい。

#### 討議題2 Speakingに関する指導の在り方(2)

(1) 基礎力を付け表現へと高める指導

言える、書けるを焦点にして“Which is your favorite, A or B?”の活動を行った。自作のカードには聞くものの絵の他に「グー」「チョキ」「パー」が描かれ、会話後じゃんけんができるように工夫されており、楽しく活動する要素も入っている。活動する際の相手についてもルールを明確にした。最後にどんな会話をしたか、2文でカードに書かせた。(浅科中)

(2) 目的をもって自己表現し、友と学びあう speaking 活動

生徒の実態より学びあいの5段階を構想し、自己表現を身に付けていくプロセスを明らかにした。実践事例として、比較・最上級、受け身を使い、聞いている人に分かりやすく発表する単位では、原稿からなるべく目を離して発表する姿と、「お~すごい」とその生徒を認める姿が見られた。継続して続けてきた結果、低位生も含めて全員に有効な活動になっていると感じている。(諏訪南中)

#### <指導者の先生の指導>

(1) 基礎の定着と活用について、基礎を身につけてから、それを活用していく場面を設定することが大事である一方で、活動を通して定着を図ることも大事である。一見逆のようにみえるが、生徒の実態に合わせて、活動から入るか、それとも言語材料から入るかを判断することが必要である。練習の場面は教師主導でもよいのではないかと考える。そして、活用の場面では、生徒に考えさせることが大切である。また、Today's GoalとToday's Pointを生徒とのやりとりを通して設定することをこれからも大切にしていきたい。

(2) 一つひとつの活動がそれぞれとつながっていてよい。どのような力を付けるのかという考えを教師が明確にもって授業に臨むことが大切である。「何を伝えるか」を精選する段階を設定しているが、膨大な伝えたいことの中から自分が何を伝えたいか精選することは大切である。作文の授業にも応用できる。学習指導要領を基に付けたい力を決め出している。この単位では4技能のうちのどの技能を付けるのかということを確認しておくことで指導に一貫性がうまれる。

### 討議題3 readingの指導の在り方と評価

#### (1) 批判的にとらえる力を高める指導の在り方

Idea Point を書き出し、本文の中で書き手が伝えるために工夫している点に注目し、返信メールの内容が書き手の意向を踏まえたものになるように見返す活動を行った友と話し合うことで、大事な文法や意味のことしか読み取れることのできなかった生徒が、書き手の意向を読み取れたという実感をもつことができた。(附属長野中)

#### (2) CAN-DO LIST を使った授業とその評価

「1年生のこの単元ならこの力がつけばいいな」ということから構想し、それらを各教科担任が持ち寄り1年生のCAN-DO LISTを作成した。今回の単元では、文化祭で話題になったディズニーランドに関連して、お勧めのアトラクションや食べ物、お土産などを提案する活動を行った。(飯島中)

#### <指導者の先生の指導>

(1) 学習指導要領の「読むこと」の(オ)に関して、Idea Point という読む視点の蓄積から、筆者の伝えたい事を Display's Message として簡潔にまとめるという活動を通して、英文をそのまま読むのではなく、思考を伴いながら読むことで読む力を育もうとしている。

(2) 教科書が変わる来年度には CAN-DO LIST にぜひ取り組んでいただきたい。1時間の授業で関心意欲態度のみを評価する事は基本的にはないので、言語材料の理解と練習の時間とするか、学習指導要領の20個の指導事項を3年間に割り振った上で、そのうちの1つを評価できる時間としたい。

### 討議題4 英語力を高めるための授業の在り方

#### (1) 英語教育における ICT 機器の活用

パイロット校の指定を受け、i-Pad が140台あるなど ICT 機器がとても充実している。Reading の指導や調べ学習において生徒の意欲・関心につながっている。音読練習に関しては、自分が読んでいる姿を個々で記録し、自分の発声の姿を録画で確認することで読む力が向上した。普段からルールを厳格にすることで、目的以外で使う生徒はいなくなっている。しかし、確かな教材研究の上で使わないと授業が成り立たなくなる。準備の時間を確保するのが課題である。(箕輪中)

#### (2) 英語力を自らつけようとする生徒の育成

文法指導に関して、少ない文例を一般化しても、定着しにくいと感じ、生徒には概念的なところを捉えつつ学習してほしいと思い指導してきた。文法を教える際に例文をたくさん与え、ルールを予想するという場面を作った。終末には、さまざまな言葉で三単現についてまとめる姿があった。2、3年生よりも1年生の方が定着率は高いことが分かった。(山ノ内中)

#### <指導者の先生の指導>

(1) I-Pad をはじめ ICT 機器が恵まれている。二人が対話して一人はそのときの会話を記録するという活動が増えてきているが、ICT を使って録画や録音すると下を見て記録に一生懸命になってしまい、対話している二人の様子が見られない状況が改善されるかもしれない。

(2) 概念でとらえるというのは大事。英語を日本語に訳して終わりではいけない。「言語への気付き」などは小学校でよく使われる言葉だが、中学校でも小学校での学習の良さを大事にして、生かしてほしい。

(文責者 長野市立広徳中学校 楯岩 雄治 先生)

## 【第2分科会】

### 討議題1 友と関わり合いながら表現力を高める指導と評価

- (1) 伝えたい所を相手にわかりやすく伝えることをねらいとして授業を構想し、自分が友に伝えたいトピックを考えてスピーチをする場面を設定した。評価の観点を5つに絞り、相互評価を位置付けた。I-Padで撮影するなど、ICT機器も活用した。(伊那中)
- (2) なかなか積極的に音読活動ができない生徒。そこで、スキットを行い、個人での練習だけでなく、その役ごとの練習やグループでの練習を取り入れた。また、音読シートを活用し相互評価を取り入れることで、自分の課題を見つけて課題を明確にして音読練習を行っていた。(豊科北中)

#### <指導者の先生のご指導>

- (1) 表現力を高めるために、ピクチャーカードを元に oral description を生徒が行う活動を続けていく。単元の中で1時間でも表現を高める時間を作ればよい。
- (2) グループ活動を成立させるためのポイントは、グループ活動が形だけになっていないか、子どもたちが手順を分かっているか、役割がはっきりしているか、アドバイスをする観点(多くても四つ)がはっきりしているか、の4点である。単元の中で数時間設定できればよい。課題については、しっかり教材研究しておく必要がある。
- (3) Lesson Goal を決め出すことが大切。そこから逆算して1時間ずつ組み立てていけば良い。また、Today's Goal を達成するための、Today's Point を設定することも大切である。
- (4) 音読は大切である。基礎基本で一番取り組まなければならないのは音読。

### 討議題2 小学校外国語活動との連携

- (1) 話す活動は、スピーチと即興性の二つに分けることができる。本単元では、即興性を目的にして構想した。75秒間で1つのテーマについて英語で対話をし、その後インタビューしたことを正しい英文にする活動である。戸惑いながらも、会話を続けていこうとする意欲的な姿が見られた。小学校での活動をどう中学校でつなげていくか。(開田中)
- (2) hi、 friends を用いて導入し、3ヒントクイズなど、誰でもできる活動でモチベーションを高めた。「共有の課題」は、クラス全員ができるものとして、アメリカの中学校生活について書かれている文を読み、日本の中学校について英語で書く、という課題を設定した。グループで書くときには様々なことを討議しながら書いているが、その中にどんな学びがあるのか、疑問がある。何をもって小中連携とするのかを考えると、中学校の職員が小学校で何をやっているのかを知ることが大切である。(鉢森中)

#### <指導者の先生のご指導>

- (1) 小中高連携について。時間を見つけてお互いの授業を見合うことが大切。そうすれば、どんな授業をすればいいのか構想が立つ。文字については、小学校でもどんどん導入されているので、中学校の最初の授業などで書かせてみてもよい。
- (2) 教科書題材を大切にして授業を構想してほしい。

### 討議題3 思考・判断・表現が充実していくための指導のあり方

- (1) ICT機器が豊富にあり、それを使った授業を展開することができる。インターネットに接続できるので、調べ学習にとっても便利である。しかし、ただ単にICT機器を使えばよいわけではない。授業の構想をしっかり立てておき、ここぞというときの資料提示ができるようにしておく必要がある。(箕輪中)
- (2) 「学びの共同体」を実践している。4人グループでの学習が基本で、「共有の課題」を設定し、教師はあまり話さず、生徒が関わり合い英語を使っていくというスタイルである。ペア

でのフリートークとそれを振り返る活動や、フリーライティングなどを行い、自由度が多い中で、間違いを恐れずに多くの英語を使わせるようにしている。(第一中)

#### <指導者の先生のご指導>

- (1) ICT 機器はどんどん使うべきである。アクティブラーニングであれば、ある画像を見て、お互いに意見を交換するなどの活動を仕組み、生徒が英語の使い方を高められるようになるとよい。
- (2) 「話すこと」の帯活動は有効である。まさに即興性である。ポイントは、自己評価や教師の賞賛があるかどうかと、ねらいをはっきりと伝えているか、教師が粘り強く続けているか、である。
- (3) 英語科における言語活動の充実とは、まさに4技能の統合である。4技能を統合している活動をどんどん行っていく必要がある。All English も大切な言語活動である。言語活動を充実させるためには教師が英語でたくさん話すことが必要になる。

#### 討議題4 複数の技能を総合的に育成する指導と評価のあり方

- (1) 「思考の可視化」ということを目指し、「読むこと」の研究を行ってきた。英語で書かれた内容を批判的にとらえるというもので、今回の研究に向けて Idea Point を作ってきた。Idea Point をもとに、筆者の意図を題材から探し、筆者が言いたかったことをまとめる活動である。単語や文の対比を意識することが、その後の読み方につながっていると感じている。(附属長野中)
- (2) 外国人が日本の文化をどのように受け止めているか、ということについて、自分が考える Cool Japan を友達や ALT の先生に聞いてもらうという場面を設定した。自分が話した Cool Japan をきっかけに、外国人の方と話題を共有し、語り合うことでコミュニケーションの喜びを感じることができた生徒がいた。(附属松本中)

#### <指導者の先生のご指導>

- (1) 「批判的に読む」ということはまだ弱いと文科省でも言われているので、よい着眼点である。目的意識を持たせることが大切。つけたい力の先にあるものは何かを見通して考える必要がある。出てきた Idea Point は、まとめてみると興味深い。
- (2) Fact Finding Question と Personal Question だけでなく、Inferential Question を読む授業の中でしっかり扱っていくことが大切。
- (3) 私たちの本業は授業である。体調管理の不十分さで、授業を欠くことは避けたい。子どもたちに迷惑をかけてしまうからである。多くの仕事があり、ストレスもたまっていくが、能率よく仕事をこなし、上手にストレスを発散して行ってほしい。教師が健康であることは、子どもたちの笑顔を生み出していく。

(文責者 佐久市立野沢中学校 上野 大 先生)

### 【第3分科会】

#### 討議題1 学ぶ喜びが感じられる授業づくり

- (1) 「分かった」「できた」が実感できる授業づくり

2年生で want to を使って、夏休みにしたいことをお互いに伝えあう授業を構想した。手だてとして、①生徒が相手の言ったことについてメモをとり、②そのメモをもとにインタビューした人の夏休みについて話す、という活動を行った。(丘中)

- (2) 生徒が前向きに取り組める授業づくり

生徒が前向きに取り組むための手だてとして①ICTを使用し(パワーポイントで提示)、②十分な練習活動を行うことで、意欲的にインタビュー活動に取り組めるように授業を構想した。

How many の導入場面で、実際に教師が須坂動物園で撮った動物の画像を見せて、画面の中にある動物の数を数えるように促すと、生徒は身を乗り出して興味深く話を聞いていた。(東中)

#### <指導者の先生のご指導>

(1) 話すことについての評価規準として「関心・意欲・態度」なのか「正確さ」なのか、この評価をすっきりさせて単元計画や授業を構想していくとよい。単元や1時間の授業で話すことの何をねらいとするのかを、明確にしていきたい。また、それらの評価規準を教科内で合わせていきたい。

「振り返り」について、何に沿って振り返るのか、という視点を大事にしたい。感想を書かせる、ということだけで振り返ると、本時の付ける力に沿って、何を振り返るのかがぼやけてしまう。話すことについては、即興的に、メモもとらないですぐに返せるような態度が必要とされている。

(2) いきなり画像を見せるのではなく、動物の話題をあげて「予想してみる」「となりと相談してみる」そして、須坂動物園の画面を提示すると、それを見る必要感がさらに出てくる。急に画像を見せるだけだと、何のために、ということが欠けてしまう。

家庭学習では、「何を目的として今日の学習をするのか」を生徒に伝えたい。生徒の良いモデルを見せたり、何のために、ということを示したりすることが大切になる。

#### 討議題2 「話すこと」の指導と評価のあり方

(1) 読んだり聞いたりしたことをもとに、英語で即興的に話す力を高めるための指導を工夫

日本にきた外国人に、外国人力士や相撲について伝える活動を行った。語彙の導入では、テレビ画面を使って、その単語と画像を見せてイメージできるようにした。次に相撲の知識について書かれたA～Dの4つの英文を読み取り、それらをヒントにして4人グループで、カードに書かれた質問を話題にして話すことにつなげる手だてとした。(筑北中)

(2) 会話を継続し発展させていくための指導のあり方

会話を継続させるための工夫として、相づち、質問、説明、感想の四つの視点に沿って授業を構想した。会話を深め、広げていくための手だてとして「会話マッピング図」を作った。

3人でグループ活動を行い、ABで会話をしている間、Cはモニター役を行い、AとBが話したことを「会話マッピング図」として記録していく。会話のあとの振り返りで、Cが書いた「会話マッピング図」をもとに振り返ることで、さらにどんな表現が使えるかを考えることができた。(戸倉上山田中)

#### <指導者の先生のご指導>

会話を継続・発展させていくことについて、丁寧にテーマを設定している。3人組・4人組というグループ活動や活動後の振り返りがあるのがよい。例えばスポーツについて話した時に、振り返りがあると、そこから関連する話題について話を広めたり、即興性にもつながったりしていく。

#### 討議題3 「読むこと」の指導と評価のあり方

英語で書かれた内容を批判的にとらえる力を高める指導のあり方

教科書の内容理解だけではなく、書かれていることを批判的に考えることで、英文を主体的に読むことができるのでないかと考えた。

博物館にある展示について意見発表会を行う場面で、単元の目標を設定し、その目標に向かって、本時の主眼を定め、教科書本文を読むことで、目的をもって読めるように仕組んだ。その中で、どうやって書き手の意向を伝えるか、について授業を構想した。手だてとして、構成・表現・話題選択を観点として書き手が意向を伝えるために工夫していると思われる点を「Idea



Point」として見つけ、書き手がそこに込めた思いを考えることで、英文に込められた自分の Display's Message を作る活動を行った。

友との意見を交換して、様々な観点から書き手の意向を考えたり、書かれている内容について幅広い視点から読むことができるようになったりした。より書き手の思いが読み取れるようになったことで、自分が文章を書く時にも役に立ったという振り返りがあった。(附属長野中)

#### <指導者の先生のご指導>

教科書本文などを生徒に深く読み取らせたいときに、それ以上に教師が深く読み取っていないといけない。「論理的に中身を読んでいくのか。」「書き手が何を伝えたいのか。」など読み手によって様々な読み方があることも考えたい。

Idea point について、こうした視点で文章を読み取らせる手だては、生徒に書き手の意向を気付かせるよい工夫となっているが、テキスト内容によって変えなければならない。構成の工夫、表現の工夫を教師側がしっかりともっていることが大切である。

#### 討議題4 「聞くこと」の指導と評価のあり方

話し手の意思を理解するための「聞く活動」の指導のあり方

ALTとのモデルスピーチを行ったあと、切り取ったスピーチのスク립トを並び替える活動を行った。並び替えたものについて、それらの意味を考えさせた。first、second、in conclusion といった表現をモデルとして使用し、「はじめ」「なか」「終わり」という構成を示した。次になりたい職業とその理由について友のスピーチをグループで聞き合う活動を行った。自分が聞く場面でのポイントを理解することで、話す時にも同じポイントに気を付けようという意識が見られた。(坂城中)

#### <指導者の先生のご指導>

聞くことを確認するための方法として、指でなぞる、という方法がある。そうすると、どこを聞いているか分かる。3回読んだら座りましょう、という活動には疑問がある。最後まで立っている生徒の心境としては自信を無くしてしまう。回数ではなく、時間で区切るという方法がある。「聞く活動」で観点を示すのはよい。何を聞けばよいのか、という観点を示すだけで分かりやすくなる。スピーチを聞く方の立場として活動を仕組むのはおもしろいが、スピーチを書く・話すことの本来の領域も大事にしたい。聞く人がいるから分かりやすく伝える、という視点を大切にしていってほしい。

(文責者 上田市立第二中学校 佐藤 大樹 先生)

#### 【第4分科会】

#### 討議題1 正しい語順やまとまりを意識した書く指導のあり方

- (1) 英語の語順が身につくように毎時間帯活動で語順ドリルをしている。自分の夢を書く場面では日本語で文を書かせて英語の語順に並べかえさせた。無生物主語の文をどのように教えるか、既習事項に当てはめきれない表現はどうすべきかという点において課題が残った。(諏訪西中学校)
- (2) ALTに町のよさを伝えるスピーチ文をペアで書く場を設定した。実際にALTに聞いてもらったあと、子ども達は本当に伝えることができたのか実感が低いようだった。最後の見とどけをどのようにすればよかったのか。(旭ヶ丘中)
- (3) コメントをもらい賛否の理由も記入することで、SNSでのコメントをするような疑似体験を設定したが、即興でコメントを書くのは難しいようだったのでコメントの書き方も事前に指導する必要性と、友との語り合いの中から伝えたいことを見つけ出した生徒の姿から個に寄り添う指導はどのようにすればよいか課題が見えた。(附属松本中)

### <指導者の先生のご指導>

- (1) 「正しく書く」ための1時間の指導の流れは、①口頭導入・モデル対話、②Today's Goal、Today's Point の提示、③充分正しく書けるようになるための練習活動（4領域の中から）、④正しく一文書く（自分にかかわった文、Lesson Goalにかかわった文等）、⑤振り返りをし、生徒が1時間の中で正しく書けたかどうかを自覚して終われるようにする。また、毎時間のドリルとしての帯活動は大事である。5分ほどで終わらせられる、答え合わせがすぐにできる内容にするとよい。
- (2) 「英文を書いて」「口頭で伝える」という活動ではねらいが二つあるため、評価、見とどけのポイントを一つにしぼること。そうすることで授業の内容もしぼられる。他者評価は子ども達にとって意欲につながる。ALTへの発表を中間に位置づけると、評価をもらった後、更にどうすればよりよくなるかグループ活動を通して考えることができるのではないか。
- (3) 子どもたちの思いや願いを授業づくりに反映しているのがよい。他者評価については、何をコメントするのか観点を与えることが必要。それは付ける力（Today's Goal）達成にむけた観点であるので、やはり付ける力を具体的な姿で教師が決め出すことが大切である。また、何を書いたかに終始することなく、書いたことでどうコミュニケーションしたかどんなコミュニケーション能力が身についたかを学ぶようにしていくとよい。

### 討議題2 生徒が意欲的・積極的に表現しようとする指導のあり方

- (1) 生徒達にとって身近である先生についてペアでクイズを作る場面を設定した。英語にしたという意欲があったが、クイズを相手に出すという意識が低かったように感じる。（若穂中）
- (2) 正しく書くこと力を付ける単元を設定した。4領域の活動をバランスよく取り入れた。Today's Goal から、生徒とやりとりをして Today's Point を決めだした。単元末の活動に対する目的意識の差に課題が見られた。（岡谷東部中）
- (3) 意欲的にコミュニケーションするために ICT を利用したり、生徒達の学区の路線図を使用し会話したりする場面を設定した。Skype を利用して会話する場面では、聞き取れないことを聞き返すなど実際の会話に近い体験をすることができた。一方で道案内の場面では路線図を見慣れていないこともありスムーズに会話練習ができない生徒もいた。（菅平中）

### <指導者の先生のご指導>

- (1) 伝えることが楽しいと思える題材探しになっていてよい。英語の授業での言語活動は知識・技能を定着させるものと活用するものがあるので単元の中できちんと分けること。4領域それぞれの指導事項（ア）～（オ）については正しさや正確さを身に付ける時は（ア）（イ）、適切さや活用をねらう時は（ウ）～（オ）を位置付けるとよい。また、気軽に友達に聞けたり自分の意見を言えたりすることで、考えの視点が広がるなどの少人数学習の魅力を個の学びに生かすとよい。
- (2) 「紹介文を書く」というだけでは「書くこと」で学ぶことは何かが曖昧である。子どもが自己評価できるように「正しく書こう」といった目標をきちんと提示する。毎回の授業では Today's Goal から Today's Point を生徒と共有し、見とどけて振り返りをする一時間完結型の授業とする。言語活動には定着をはかる言語活動と、活用を学ぶ言語活動がある。定着をはかる言語活動では新しく学ぶ言語材料がきちんと身につくようにしなければならないし、活用を学ぶ言語活動では4領域それぞれの活動を通してどのようなコミュニケーション能力を学ぶのかをきちんと決めだして授業をしなければならない。
- (3) 子ども達の生活、故郷に繋げていて楽しめる教材を工夫してくださっている。音読は4領域の要である。文字と音、意味と音が一致するように指導すること。また生徒の振り返り時

間は感想ではなく、内容・方法・意欲について振り返りをさせ、教師が Today's Goal と照らし合わせて授業に触れ、きちんと授業を締めくくることが。

### 討議題3 意図を捉えたり理解したりして、自分の考えを発信できる授業の創造

- (1) 文化祭で既習の表現を基にした英語劇をする場面を設定した。シナリオを全て生徒が作り、プレゼンによって代表者を決定する。7年目になり、毎年恒例の行事となっている。Today's Point の観点をどのようにもつべきか課題が残った。(埴生中)
- (2) 批判的に英語で書かれた内容を捉える学習をした。友と意見交換をする場面では新たな気づきがある一方で自分の考えと必ずしも一致するわけではないと考えた生徒がおり、書き手の意向を選び出す観点が明確に共有されていなかった点に課題が残った。(附属長野中)

#### <指導者の先生のご指導>

- (1) 文化祭発表という恒例の活動なので子ども達は毎年先輩や仲間の発表を見ていてアイデアを浮かべて「自分ならこうしたい」という意欲につなげており、英語科としての取り組みが充実していることを感じる。教科書本文を用いスキットを作ることで、誰もが既習もしくはこれから学ぶ教材であるため全校で共有できるということもよい。授業においては付ける力を明確にして取り組ませること。「聞き手に正しく伝える」コミュニケーション能力を育てるためどういう言い方(伝え方)をしたらいいかを生徒にきちんと追究させたい。
- (2) ただ読み取るのではなく、書いている人の立場に立ち読ませているのがよい。「読むこと」のコミュニケーション能力を学ぶ時、単に「書き手の意向をつかむ」と言ってもそれは文のタイプで読ませ方は変わる。日記文の読み方で説明文を読んでも書き手の意向をつかむ着眼点は違うはず。その点について教材研究を更に深めてほしい。

(文責 小諸市立小諸東中学校 小栗 千佳 先生)

## V 本年度研究会の反省と来年度への方向

### ◎本年度の反省

項目	内容
○本年度の研究テーマについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「コミュニケーションの基礎」を教師も生徒も互いに理解していく必要がある。</li> <li>・コミュニケーションの構想化と評価の在り方は、2年以上で一つ一つについて深く研究していく価値のあるものだと思う。</li> <li>・コミュニケーションは英語のツールとして使うためにも必要な要素だと思うので、研究するほど深くなるものだと思う。</li> <li>・今日的なテーマでよいと思う。</li> <li>・コミュニケーションの定着が難しく、迷いながら進めている。また、教科書を活用したコミュニケーションの在り方に課題を感じている。</li> </ul>
○研究の主な内容と研究の成果について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本校でもまだまだだと思える部分が多く、参考になった。</li> <li>・評価についてまだ研究が深められていません。来年度も引き続きご提案ください。</li> <li>・授業の中で、互いのやりとりを行わせる活動を行うようにし、コミュニケーションを行えるように工夫しています。</li> <li>・話す、聞く力の評価、とても勉強になりました。</li> <li>・各校コミュニケーションということ意識している研究が多いように思います。また、子どもの具体の姿で、挑戦されている印象があります。</li> </ul>

○研究の方法や経過について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業での課題を教科でアドバイスいただきながら進めている。</li> <li>・どこかで全県に周知できるとよいと思う。</li> <li>・話すことを苦手と感じている生徒が多いと思う。</li> <li>・各校で実態に応じた積み重ねができていてよい。</li> </ul>
○研究会当日の運営について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・レポートが間に合わない場合は、当日持参可だったのが大変ありがたかった。また、当日レポートを読む時間をいただけて良かった。</li> </ul>
○研究集録等のWebページ掲載について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初任者にとって、何をどの程度書けばよいか迷いました。レポートの実際が各教科一つホームページに掲載しているとよいと思う。</li> <li>・HPに文書の書き方等を載せていただき、分かりやすかったと思います。</li> <li>・先生方、生徒のみなさんの細やかな気配りが嬉しかったです。</li> </ul>
○本年度運営全般について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・できればメールだけではなく、郵送でも送っていただけるとありがたい。</li> <li>・実証授業の関係でメール添付でなく郵送となったのが、少し大変であった。できればメール送付がありがたい。</li> <li>・申し込みがぎりぎりになってしまい、レポートの準備や連絡等が遅くなってしまい、申し訳なかった。</li> <li>・担当者が受けていたので、メールの使用についてはよくわからない。当日の附属中の先生方、生徒の方の準備には感謝。</li> </ul>

#### ◎来年度の方向

○来年度の研究テーマ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・来年度も変えない方向でよいと思う。</li> <li>・「話すこと」に寄せたテーマで研究を深めていただきたい。</li> <li>・「コミュニケーション」というキーワードは残したほうがよい。</li> <li>・引き続き「授業構想・展開のあり方」に関わる内容でよい。コミュニケーションを焦点においてほしい。</li> <li>・評価のあり方とあるべき具体の姿。</li> <li>・教科書の活用法や内容に関連した授業展開について。</li> <li>・コミュニケーションの基礎、特に、「かかわり力」を付けることに重点を置きたい。</li> </ul>
○来年度の研究の趣旨	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科書改訂となるのでそれを基にこのテーマを深められるとよい。</li> <li>・英語教育の大きな変化がやってきているので、そのあたりからテーマにするポイントを決めだしていったらよいと思う。</li> <li>・<b>Reading</b> を <b>Inferential</b> な部分まで読み深め、次の活動につなげる。</li> <li>・<b>Can-Do List</b> 導入に向けて評価について研究していくべきだと思います。特にその方法の具体を知れたらと思います。</li> <li>・教科書の本文や <b>Reading Plus</b> の扱いについて授業でどのように指導に活かしているか。</li> </ul>
○来年度の研究の方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>Can-Do</b> リストとリンクして活用でどのようなことを行っているのかをレポートしていただく。</li> <li>・来年度も他の先生方の授業を見させていただくとともに、研究会などにも積極的に参加したいです。</li> <li>・<b>Lesson Goal</b> を通して学期ごとでもよいので、どうだったか研究できたらよいと思いました。</li> <li>・各校での研究で行うのがよいと思います。</li> </ul>

○その他、改善したい点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全校研究テーマの周知徹底が難しかった。テーマが出るのが8月、追加申し込みで10月になるとなかなかテーマに沿ったレポートにならず申し訳なかった。</li> <li>・レポートなしで気軽に参加できるとよりよいと思う。</li> <li>・よりよい研究会にするために参会者も事前にレポートを見られるとよいと思う。</li> <li>・多くの先生方が参加できるように（レポートなくても）テーマを区切って募る（主催者側）管理職の先生方よりしっかり声をかけていただく（参会者側）というような工夫が必要だと思った。</li> </ul>
-------------	---

## VI あとがき

本年度も県下各地より多くの先生方にご参会いただきました。お集まりいただいた先生方のレポートには、生徒のコミュニケーション能力の基礎を育成するための具体的な手だてや、教科のあり方についてまとめられたものが多く見られました。先生方の日々の実践に基づいて生徒の具体の姿から熱心に協議を深めていただき、明日からの実践に役立つ大きな成果をあげて研究会を閉じることができました。

今年度も4分科会での開催となりました。先生方の積極的なご発言等により、活発な討議となりました。終日にわたって全参加校の研究内容と今後の方向についての的確なご指導、ご助言をいただきました指導者の伊藤 尊夫先生、川口 伸哉先生、三井 康幸先生、宮下佐知子先生、レポートをくまなくお読みいただき、綿密な司会計画により協議を深めていただきました司会の櫻田 智也先生、西村 晃洋先生、勝山 厚志先生、飯島 廣樹先生、また、当日の記録及び研究集録のまとめに多くの時間を割いてご尽力いただきました記録の楯岩 雄治先生、上野 大先生、佐藤 大樹先生、小栗 千佳先生に心より感謝申し上げます。そして、お忙しい中、日々の実践をレポートにまとめ、熱心に協議に参加され、研究会を実りあるものにしてくださった参会の先生方に心から感謝申し上げます。

来年度も多くの先生方が参加され、英語教育のあるべき方向を求めて、より有意義な研究会にしていただくことを願い、また、先生方の今後の一層のご活躍を祈念申し上げ、御礼とさせていただきます。ありがとうございました。

委員 長 矢野 司  
副委員 長 矢島 裕文